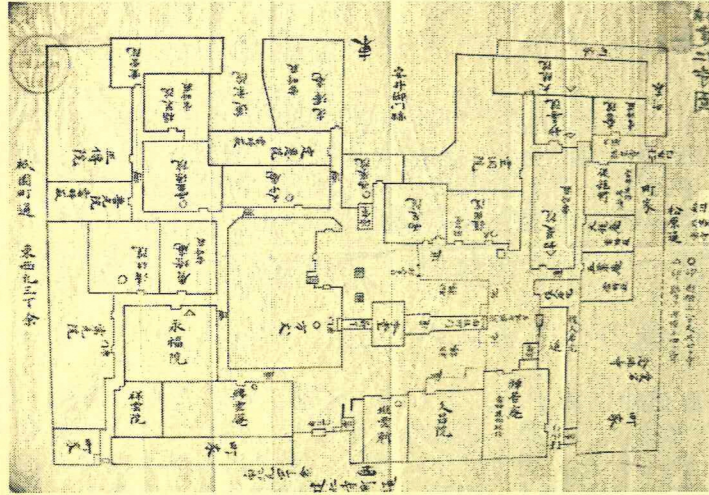


【加賀藩京都屋敷】

文久3年(1863)14代将軍徳川家茂が上洛したが、これに供奉する形で加賀藩13代藩主前田斉泰も上洛した。その際斉泰は建仁寺に本陣を置き、以降も藩主上洛の際には建仁寺を宿所としていた。また、すでに寛文元年(1661)に三条河原町に屋敷を構えていたが、元治元年(1864)に世嗣前田慶寧が京都警衛を命ぜられたことから、岡崎の地を新たな屋敷地として願い出て、慶応3年(1867)に幕府より正式に了承された。

- ・建仁寺図 (16. 52-88)



建仁寺を宿所とすることについて、「○印 御借入方丈共七ヶ寺」「△印 跡ヨリ御借入四ヶ寺」とあり、借入の状況がうかがえる

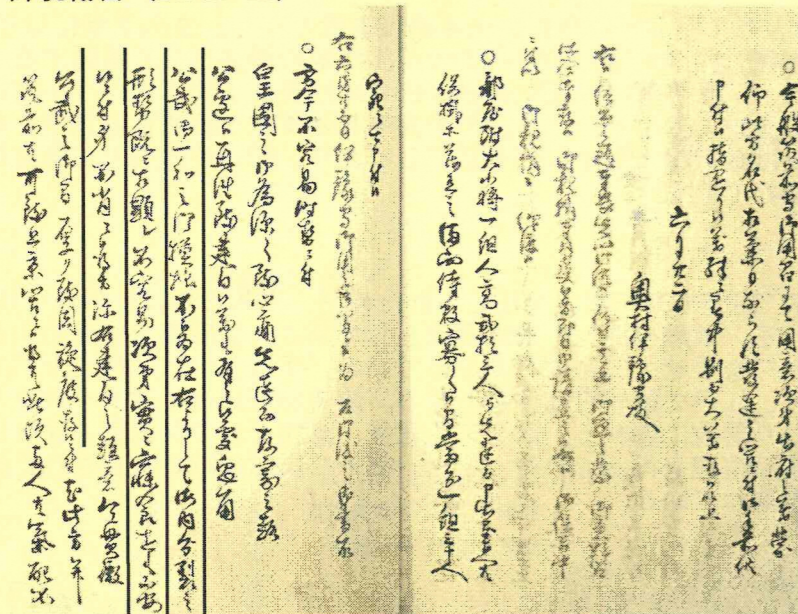
- ・元治新撰皇都細見図 (22. 2-115)
- ・京都新御屋敷老歩碁之図 (18. 6-25)
- ・海津御屋敷之図附邸地考 (16. 18-122(1) (3))

【斉泰による国事介入の宣言と将軍上洛】

文久3年(1863)7月、藩主前田斉泰が幕末政局に介入することを宣言した。当時加賀藩は、朝廷・幕府からの異なった命令に苦慮しており、このような状況を克服するため、将軍への大政委任による公武合体を掲げて活動していった。

そして、文久3年冬に将軍徳川家茂が上洛する際、軍艦を保有する藩に対して軍艦徴用が命じられたため、加賀藩は前年に購入した発機丸を向かわせることになり、所口(七尾)を出発後、箱館経由で品川へ入り、その後兵庫に入港した。

- ・御親翰留 (16. 25-28)



朝廷(公)と幕府(武)が一和しておらず国内分裂という容易でない情勢のため、藩主前田斉泰が思い悩み、公武の間を周旋することを宣言している

- ・発機丸航海日記 (16. 52-45)

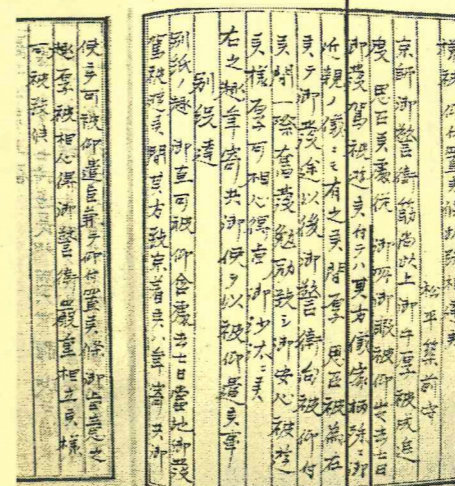
軍艦頭取安井顕比による航海日記であり、所口-兵庫間の航海過程が詳細に記されている。また、本日記の時刻表記が現在と同様であることから、西洋技術導入の一端がうかがえる

【禁門の変と慶寧退京】

元治元年(1864)7月19日、会津藩や薩摩藩を中心とした禁裏御門を警固する軍勢と、上洛してきた長州藩兵とが激突した禁門の変(蛤御門の変)が勃発した。当時の加賀藩は、世嗣前田慶寧が幕府から京都警衛を任命されていたが、事件直後に退京許可を得ないまま京都を離れてしまう。

体調不安のなか、慶寧は加賀藩領であった海津(滋賀県)に逗留して保養に努めたが、帰国後には謹慎蟄居の処分を受けており、京都詰であった家老松平大式は慶寧の無断退京の責任を取る形で切腹した。

- ・雑記 (16. 28-196(1))

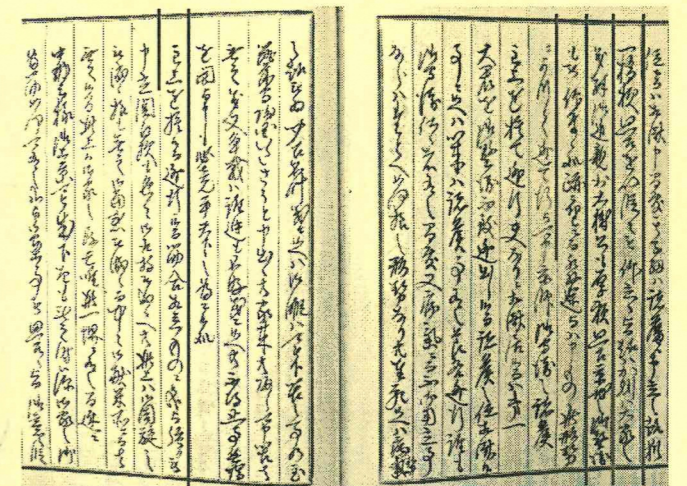


徳川家との関係が「御近親」であることから、将軍家茂退京後の京都警衛を上洛中の世嗣前田慶寧に委任する旨が記されている

- ・前田慶寧公御写真 (k7-124)
- ・佐川良助筆記 (16. 28-198)

京都詰家老松平康正(大式)の切腹の様子が記されている

- ・京都御用状等内写 (16. 45-56)



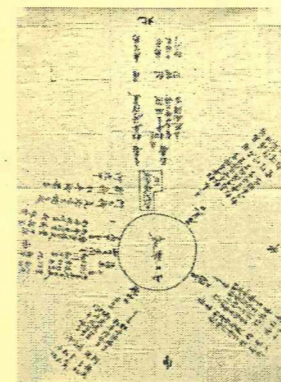
禁裏御守衛総督一橋慶喜は、将軍の思召によって京都警衛任務に就きながらも「跡届」という形で退京した慶寧の行動を「逃(逃)行」とし、筋が立たないと批判している

【長州戦争と御所警衛】

禁門の変後、長州藩に征長の勅命が出され、幕府は前尾張藩主徳川慶勝を総督、越前福井藩主松平茂昭を副総督として征討軍を組織した。加賀藩は、世嗣慶寧退京の汚名を返上するために幕府への参加を願い出、一度は却下されるもその後参加を認められ、在京の年寄長連恭(大隅守)は兵庫から発機丸に乗り込み、幕府の本陣が置かれた広島に向かった。

また、当時は諸藩が三か月交替で御所九門の警備に就いており、加賀藩も藩主または名代の年寄がたびたび上洛していた。

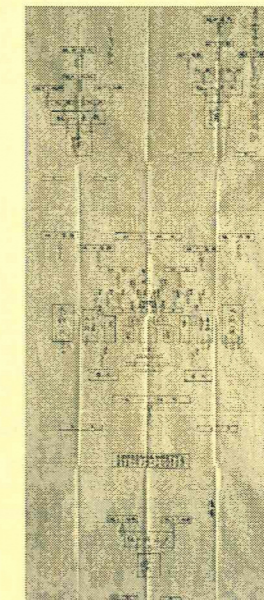
- ・長州征伐配備図 (16. 52-41)



岩国方面老番の末尾に、「名代長大隅守」とある

- ・鳳闕御警衛図 (大1291)
- ・御用方手留 (094. 0-39(53))
- ・出陣之節御条目等 (16. 52-54)
- ・山口城之図 (大1342(1))
- ・長州征伐陣図 (大1342(2))
- ・北川系譜 (16. 31-108)

- ・御在京中御守衛御備御人配図 (16. 52-79)

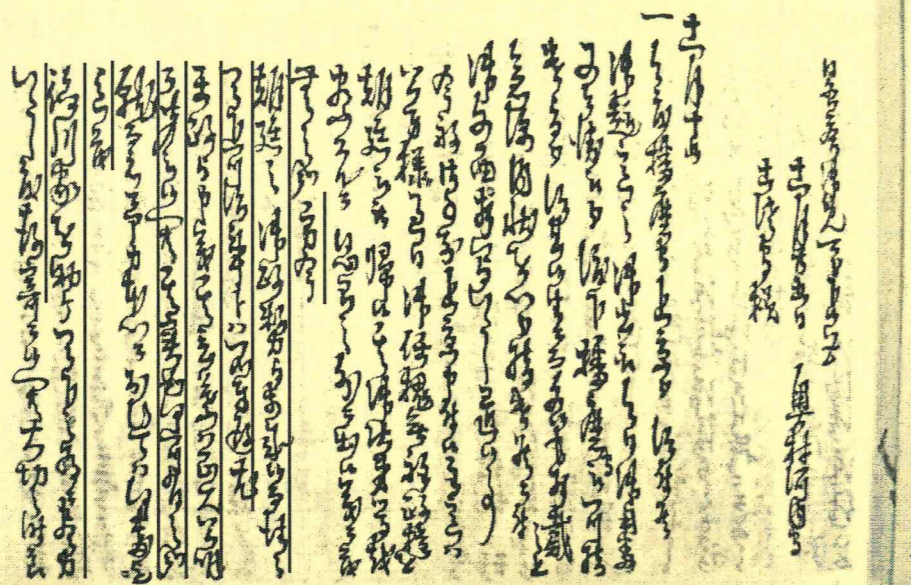


御所警衛のための編制で、先備(前田直信・村井長在)・中備(旗本)・後備(横山政和)の名が記されている

【慶応3年の政局】

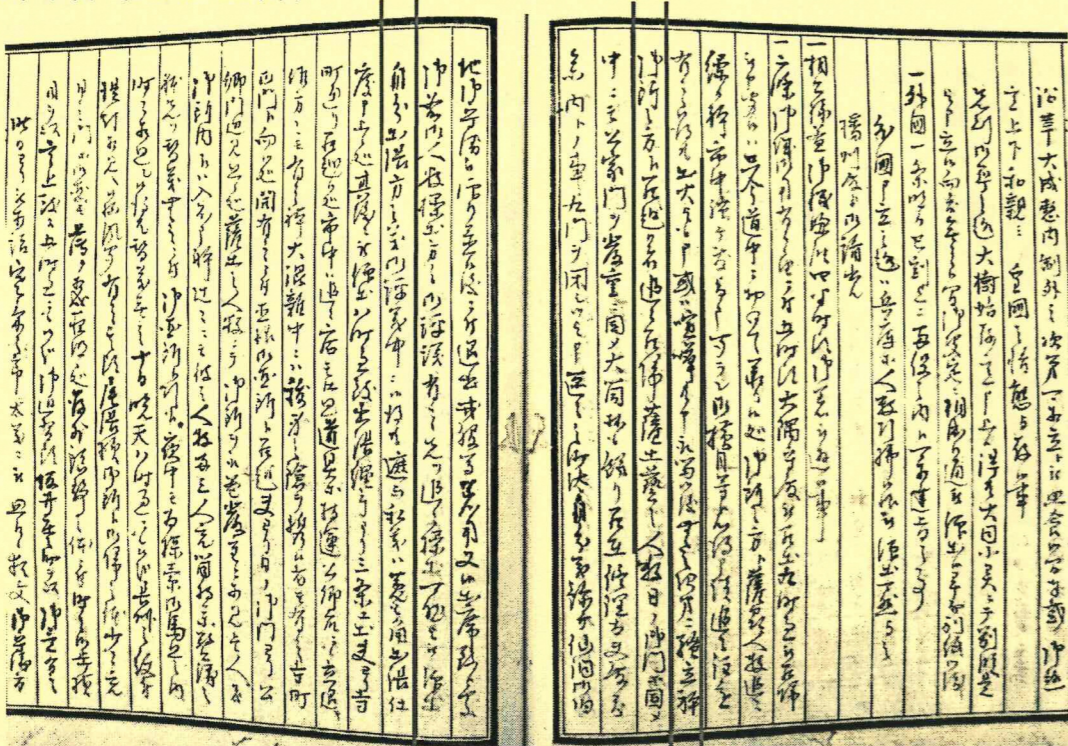
慶応2年(1866)4月に家督を相続した前田慶寧は、慶応3年10月の大政奉還後に周旋目的で上洛したが、到着当日に王政復古の大号令が出されたことで、政情不穏のなか数日で帰国した。その後、藩内では藩の方向性を巡りいろいろな意見が出るなか、翌年鳥羽・伏見の戦が発生すると、慶寧は徳川家支援を目的とした出兵を宣言し、年寄村井長在(又兵衛)らが出発したが、その後京都詰の周旋もあり、兵を引き返して維新政府への恭順の意を示した。

・御用方手留附録 (094.0-39(81))



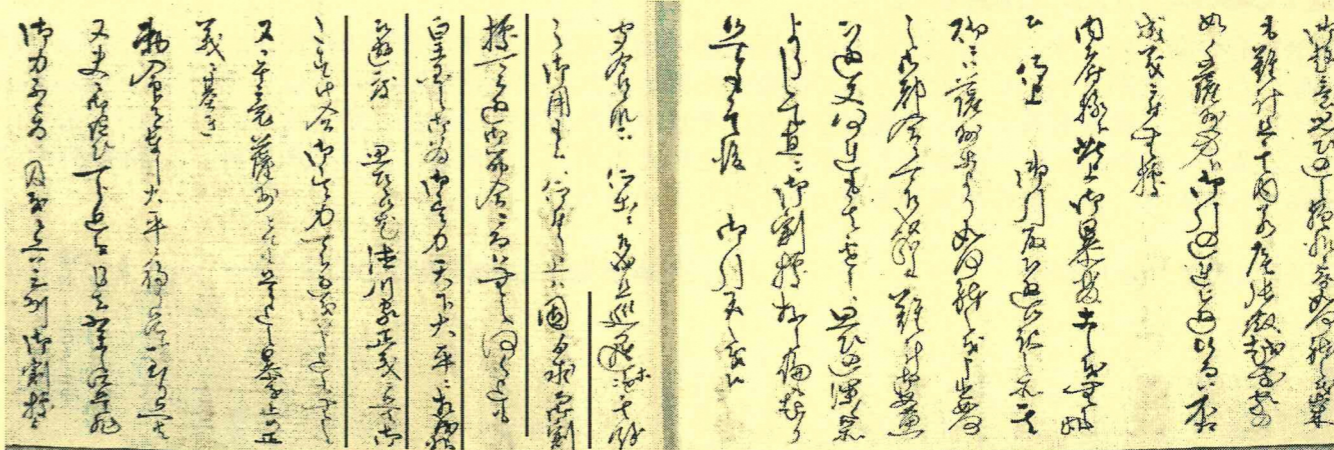
慶応3年(1867)10月13日に大政奉還がおこなわれ、諸大名に上洛の命令が出されるが、藩主前田慶寧は病のため、名代として年寄本多政均(播磨守)が上洛することになった。その際に出された慶寧の親翰には、朝廷が政務を担当することに対する不信感と、慶寧自身は徳川家を助けて天下のために尽力する旨であることが記されており、大政奉還後の慶寧の考えがうかがえる

・京都詰中手留 (16.45-58(3))



慶応3年12月9日、藩主慶寧が京都に到着し建仁寺に入るが、同日に王政復古の大号令が出され、京都は大きな騒擾となった。京都詰家老前田孝錫が記した日記には、「出火とも申、或ハ喧嘩共申、取留候儀無之次第ニ騒立躰」と、混乱ぶりが記されている。詰家老前田孝錫は御前評議を逃して「菟毛角出張仕度」と警備に向かっている。

・御内々御尋并申上候品等覚 (16.41-67)



王政復古の大号令から3日後の12日に藩主前田慶寧は退京するが、国元では御割拠が議論されるなど、藩の方向性を巡り混乱していた。金沢に帰着後、慶寧は家老の横山政和と本多政醇を呼び、もとより求めて御割拠を選択する筋合いはないこと、皇国のため天下太平となるように尽力すること、徳川家が正義であり助け合い尽力することは申すまでもないことなどを述べている。

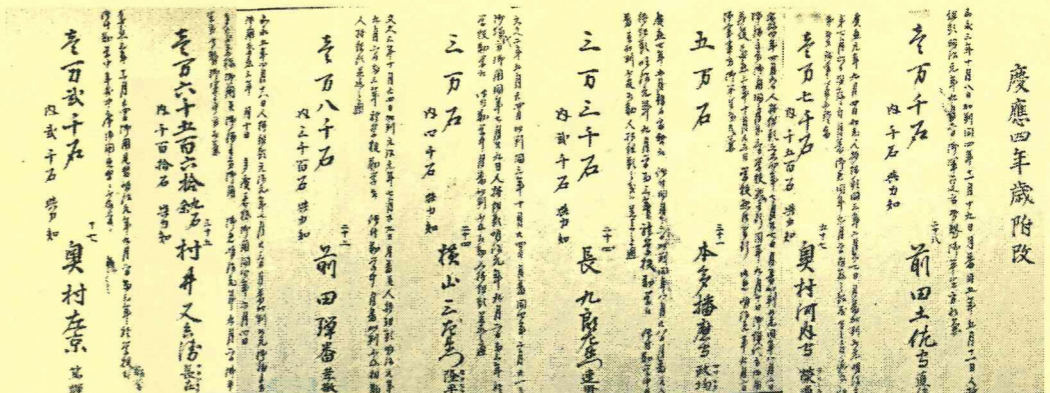
・御意之趣書拔 (16.25-46)

鳥羽・伏見の戦後に出兵する加賀藩士に出された親翰の書拔で、皇国のために徳川家に協力し、一戦する覚悟で粉骨を尽くし忠勤を励むように命じている。

【明治初年の加賀藩】

明治政府の政策により加賀藩内の職制も大きく変更され、藩上層部は年寄一家老の体制から執政一参政、大参事一少参事へと変更されるとともに、少禄ながら実務能力に秀でた者達が登用され、八家や人持からは政治の表舞台から遠ざかる者達が出てきた。明治2年(1869)6月、版籍奉還によって金沢藩となり、藩主慶寧は金沢藩知事に任じられるが、明治4年7月の廃藩置県により金沢藩は廃止された。

・明治元年御礼之次第 (16.33-49)



御礼の順は八家が並んでいる

・御礼次第 (16.33-51)



御礼の順が前年のような八家の並びではなくなり、少禄の者が藩政に抜擢されていることがわかる

・前田慶寧公告論 (090-820)

藩大参事横山政和宛で、廃藩置県に対する心構えを記したもの